

学習評価を軸とした中学校国語科の授業改善

—学びの成果を実感するための目標—指導（活動）—評価の一体化の工夫—

山崎 艶子

Improvement of Junior High School Language Arts Classes Based on Learning Evaluations:
Integrating Objectives, Guidance, and Evaluation to Help Students Realize Learning Outcomes
Tsuyako YAMAZAKI

1 問題の所在

大学院入学前、「指導に生きる評価とは」という疑問をもっていった。また、「国語の授業は、何が正解かわからないから嫌い」という生徒の声もあり、ゴールの姿が見えにくい授業を改善したいと思っていた。大学院入学後、学習評価に関する様々な実践や先行研究に触れ、目標と指導と評価を三位一体とする単元展開が、ゴールの姿を明確にする糸口になると感じた。そして、目標・評価を共有することで、生徒が学び方をメタ認知し、「こうすればできる、わかる」を実感できる授業になるのではないかと考えるようになった。更に、身に付けた学び方を別の場面で活用する学びの必要性も痛感した。生徒が身に付けた学び方を別の場面で活用し、「できた」「わかった」と実感できる単元展開・授業作りを目指した。

2 学習評価を軸とした単元展開・授業作りについて

従来の授業では、評価規準は設定されていたが、生徒の具体の姿が明文化されることはあまりなかった。今回は、評価規準だけでなく生徒の具体の姿を明文化する。それを、「評価指標」とした。評価指標を作る際は、まず、評価規準のB評価から考える。次に、「生徒の具体の姿」として、振り返りで生徒に書かせたい内容を文章化する。これにより、ゴールの姿（目標達成の姿）がより明確になる。

今回の単元展開作りでは、まず、単元目標を設定し、次に最終次の評価指標（表1）を作る。そして、最終次の「生徒の具体の姿」を目指して、単元展開を考える。更に、毎時間の目標を基に各次の評価指標を作り、その評価指標を基に指導や活動を考える。このように、「目標」「評価指標」を軸に指導や活動を考える「目標と指導（活動）と評価が一体化」した単元作りをする。評価指標が授業前にあれば、目標達成の姿やそれを目指す指導や活動も明確になり、学び方を身に付ける指導がしやすくなる。また、学習目標や評価指標が生徒と共有できれば、生徒が目標達成を目指し、学び方を実感できるのではないかと考えた。

更に、従来の単元作りとは異なる点として、学び方を別の課題で活用させる場を作る。それにより、生徒が学びの成果を実感しやすくなるのではないかと考えている。目標と指導（活動）と評価の一体化により、生徒が学び方を身に付け、その学び方を活用する場の設定により、生徒が学びの成果を実感する。そんな姿

表1 最終次の評価指標

	評価規準	生徒の具体の姿
A	「起承転結」の文章構成、具体例や問題提起に答える形などの表現の工夫について、主張をより分かりやすくしようとする筆者の意図を踏まえて説明する。	○「起」で話題を出し、「承」で更に循環型社会について説明し、転で循環型社会の実現する方法について説明して、結で筆者の主張をするという文章構成にしている。 ○私たちが身近でできることや企業等で取り組むこと具体例を出すことで、主張を理解しやすくしている。 ○まず循環型社会について、そしてそれを実現する方法について問題提起に答える形にして、内容を少しずつ詳しくして読者にわかりやすく説明しようとしている。
B	「起承転結」の文章構成、具体例や問題提起に答える形などの表現の工夫について、どのようにしてわかりやすくつたえようとしているか筆者の意図を踏まえて説明する。	○起承転結で内容を整理して分かりやすくしようとしている。 ○具体例を出すことで、身近な方法で実現できることを分かってもらおうとしている。 ○問題提起に答える形にして、何について説明しているかを分かりやすくしたり、興味をもたせたりして内容を理解してもらおうとしている。
C	問いかけや具体例などをあげることができるが、筆者の意図を考えるのが困難である	○起承転結が分かった ○具体例でわかりやすくしている。 ○問題提起に答える形にしている。

を目指した単元展開・授業作りを実践し、分析したいと考えた。

3 研究の目的と方法

<研究の目的>

【研究目的1】目標と指導（活動）と評価が一体化した単元展開作りによって、生徒が目標達成の姿をイメージし、学び方を身に付ける

【研究目的2】学び方を別課題で活用する場の設定によって、生徒が学びの成果を実感する

<研究の方法>

研究協力校において、6月と10月に中学2年生2学級で国語科の授業を2単元行う。【研究目的1】

【研究目的2】をもって授業実践1を行い、そこで明らかになった課題を踏まえて、授業実践2を行う。分析は、授業終盤に生徒が書く振り返りの記述を基に行う。

4 授業実践

(1) 授業実践1

① 単元展開・授業作り

【研究目的1】目標と指導（活動）と評価が一体化した単元展開作りによって、生徒が目標達成の姿をイメージし、学び方を身に付ける

次のI～VIの手順で単元目標や評価指標を作り、それを基に単元展開・授業を構想した。

I 指導事項（付けるべき力）を決定する

文章構成や表現の仕方に着目させることで、今後の読解の助けになると考え、指導事項「C読むことウ 文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめること」を取り扱うことを決定した。

II 学習指導要領解説を参考に、単元目標を考える

「C読むことウ」の解説の中の、「そのような表現をした書き手の目的や意図を考えたり、その効果について考えたりすることを指導する」から、単元目標を「文章の構成や展開、表現の仕方とそのような表現をする筆者の意図を説明する」とした。

III 単元目標を達成しやすい教材を選定する

大段落の役割や表現の工夫が明確な教材が適するという考えから、『循環型社会』とは何か（片谷教孝著、三省堂中学2年教科書）を教材とした。

IV 最終次の姿として、教材でおさえたいポイントを入れて最終次の評価指標（表1）を作成する

おさえたいポイントを、この教材の構成や表現の工夫である「問題提起に答える形」「具体例」「起承転結の構成」、そういう表現をする筆者の意図（表現の効果）と考えた。そして、その2点を入れて説明する姿を文章化した。

V 最終次の評価指標から、できるようにしたいこと・指導・活動を考えて、単元展開案（表2）を作成する

特に、第1次において、「なぜ筆者の意図を説明するのか」という目標の意義を、生徒が理解することが必要だと考えた。そして、その構成や表現の仕方からどんな意図が感じられるかを出し合う活動を行った。授業終盤に単元目標と目標達成した姿を確認する授業を計画した。

VI 毎時間の目標を別に設定し、それらを基に各次の評価指標を作成する

【研究目的2】 学び方を別課題で活用する場の設定によって、生徒が学びの成果を実感する

最終次（第6次）において、「天気を予報する」（出典：光村図書小学5年教科書）という別教材を使い、「文章の構成や展開、表現の仕方とそのような表現をする筆者の意図を説明する」活動を導入した。

表2 「『循環型社会』とは何か」単元展開案

次	学習課題・学習活動	評価規準
1	○文章を読み比べよう ・同じ内容でも構成・表現の違う文章を読む ・筆者の意図によって構成や表現が違ってくることを知る	・文章の構成や表現と、筆者の意図が関係あることに気づくことができる【ワークシート】
2	○筆者の主張を説明しよう ・主張がどこにあるかおさえ、キーワードを使って説明する	・筆者の主張を、「循環型社会」「一人一人」「社会全体」という言葉を使って表現できる【ワークシート】
3	○「循環型社会」とは何か、説明しよう ・循環型社会について説明している位置をおさえ、分かりやすく説明し直す	・「循環型社会」について、言い換えた言葉を使って説明することができる【ノート】
4	○問題提起に答える形式をとる筆者の意図を考えよう ・グループごとに3つの視点から、そう表現する筆者の意図を考える	・「内容を明確に」「興味をもたせる」というような言葉を使って、問題形式に答える形式をとる筆者の意図を説明することができる【ワークシート】
5	○具体例を提示する筆者の意図を考えよう ・グループごとに3つの視点から、そう表現する筆者の意図を考える	・「身近」のような言葉を使って、具体例を提示する筆者の意図を説明することができる【ワークシート】
6 (最終次)	○起承転結の文章構成について知ろう ・起承転結の文章構成を知り、他の文章でも構成を確認する。	・構成や表現の工夫とそう表現する筆者の意図を説明することができる【ワークシート】

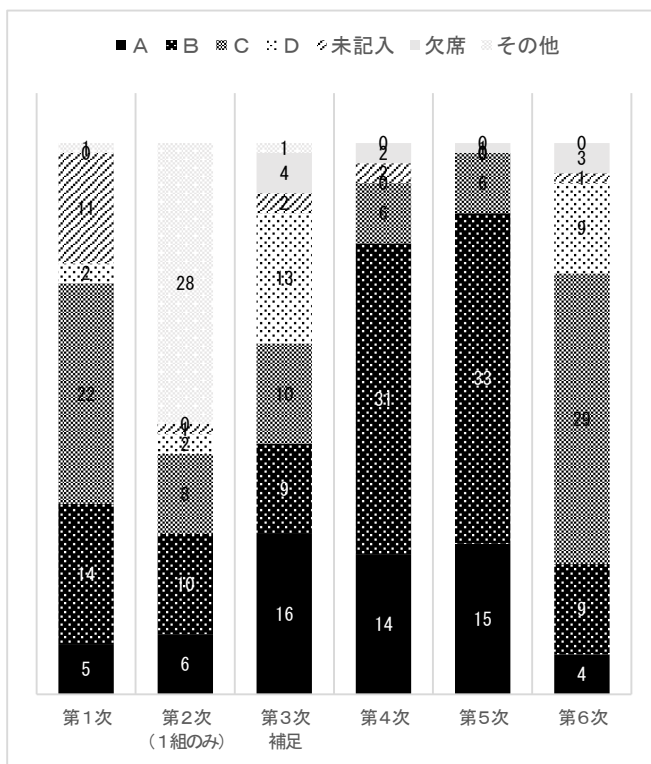


図1 「循環型社会」とは何か 目標達成の状況

② 結果と考察

【研究目的1】 目標と指導（活動）と評価が一体化した単元展開作りによって、生徒が目標達成の姿をイメージし、学び方を身に付ける

成果は、各次の授業において、目標達成の姿をイメージして活動する授業形態にできたことである。単元展開作りの段階で、目標達成の姿（評価指標）を基に指導や活動を構築することは有効であった。

課題は、1時間1時間の積み重ねを、最終次の単元目標の達成につなげられなかったことである（図1）。主な原因は二つある。一つ目は、第1次で単元目標の共有化ができなかったこと。そのために、生徒が単元目標達成の姿がイメージできなかった。二つ目は、単元のまとめを「分かったこと」という曖昧な問いでのまとめにしてしまったことである。学び方を習得できたかどうか、明確に分析することもできなかった。どのような学習課題によって、身に付けた学び方を可視化するかが大きな問題である。授業実践2に向けて、第1次での単元目標の共有化、学び方が可視化できる振り返りや単元のまとめの必要性が明らかになった。

【研究目的2】 学び方を別課題で活用する場の設定によって、生徒が学びの成果を実感する

筆者の意図と共に説明できた生徒は1割を切った。しかし、1年次の学びである「ナンバリング」「写真やグラフ」の効果などを記述した生徒もいた。意見交流の場を設定すれば、既習の学びを新たな学びと結びつけることができる。課題は、学習課題とワークシートである。【研究目的1】と同様に、生徒が身に付けた学びを、どのような問いによってどのように表現させるか、工夫の必要性が明らかになった。

(2) 授業実践2

① 単元展開・授業作り

【研究目的1】目標と指導（活動）と評価が一体化した単元作りによって、生徒が目標達成の姿をイメージし、学び方を身に付ける

授業実践1でできなかった「評価指標の共有化」をするために、自己評価を導入し、学びの成果を実感できる授業作りを目指した。

I 指導事項（付けるべき力）を決定する

指導事項「C読むこと エ 文章に表れているものの見方や考え方について、知識や経験と関連付けて自分の考えをもつこと」に決定した。

II 学習指導要領解説を参考に、単元目標を考える

解説の中の「これまでに身に付けてきた知識や様々な体験と関連付けて」から、学習目標を「筆者の意見に対して根拠をもって考えをまとめよう」とした。

III 単元目標を達成しやすい教材を選定する

筆者の意見がユニークで賛否が分かれやすく、生徒が経験と絡めて考えをもちやすいであろうと考え、「学ぶ力」（内田樹著、教育出版2年教科書）を教材とすることに決定した。

IV 最終次の姿として、教材でおさえたいポイントを入れて最終次の評価指標（表3）を作成する

表3 「学ぶ力」最終次の評価指標

	評価指標	手紙の具体例
A	筆者の意見を受け止め、共感できるかできないか、根拠として知識や経験を入れて書いている。そして、「学ぶ力のある人」について、筆者の考えとは違う視点を見つけて、自分の意見を広げたり深めたりして書いている。	筆者の意見には共感できる部分と共感できない部分がある。部活動でも「学びたいのです、教えてください」ということを、先生だけでなく、先輩に向けて、うまくなることがあるからだ。私にはあこがれの先輩がいて、まねをしてシュート練習… しかし、「教えてください」という姿勢でなくても、学べる事があることも知った。この学習の中で、「反面教師」という言葉もあることを知ったのだ。「この人のようになりたくない」という人も師ということになり、学ぶことができるということに気づくことができた。 学習後、学ぶ力のある人とは、いつでも学ぼうとする人、師と思えない人からも何でも吸収しようとする人ということに加えて、あきらめずに学び続ける人だと思うようになった。あこがれの先輩のまねをしてシュート練習をしていた時、ちょっとした失敗やなかなかうまくならないことであきらめかけてしまうことがあったことを思い出した。しかし、あきらめずに…ちょっとした失敗や分からないことでつまずいても、「もう一回がんばろう」「先生や先輩にわかるまで聞いてみよう」とあきらめずに学ぼうとする人が学ぶ力のある人だと思う。
B	筆者の意見を受け止める、共感できるかできないか、根拠として知識や経験を入れて書き、自分の意見を書いている。	「学び足りないという自覚があること」という意見に、共感できる。例えば、英語の授業で「俺は、英語は必要がないから」と思ったら、何もやろうとせず英語はできない。「英語ができれば、外国の人ともっと話せるようになる、だから、ALTの先生にいっぱい話しかけよう」という意識でやると、上達が早くなるようだ。私の友達で、… 学習後、学ぶ力がある人とは、自分から学ぶ場をどんどん見つけて、たくさん質問したりして勉強する人だと思った。
C	筆者の意見に対して、共感できるかできないかを書けるが、根拠として知識や経験を入れて書くことができない。	「学び足りないという自覚があること」という意見に共感できる。なぜなら、自分から学びたいと言える人はやる気のある人で、やる気がないと何にも考えることも覚えることもできないからです。学び足りないという自覚があれば、もっともつととどンドン伸びていくと思います。 学ぶ力がある人とは、やっぱり、やる気のある人だと思った。
D	筆者の意見を正しく受け入れることができていない。もしくは、共感できるかできないかの意見が書けない。	「師をその気にさせる」と思うというのには共感できる。なぜならあいさつをしかりしないと教えてもらえないからだ。

V 最終次の評価指標から、できるようにしたいこと・指導・活動を考えて、単元展開案（表4）を作成する

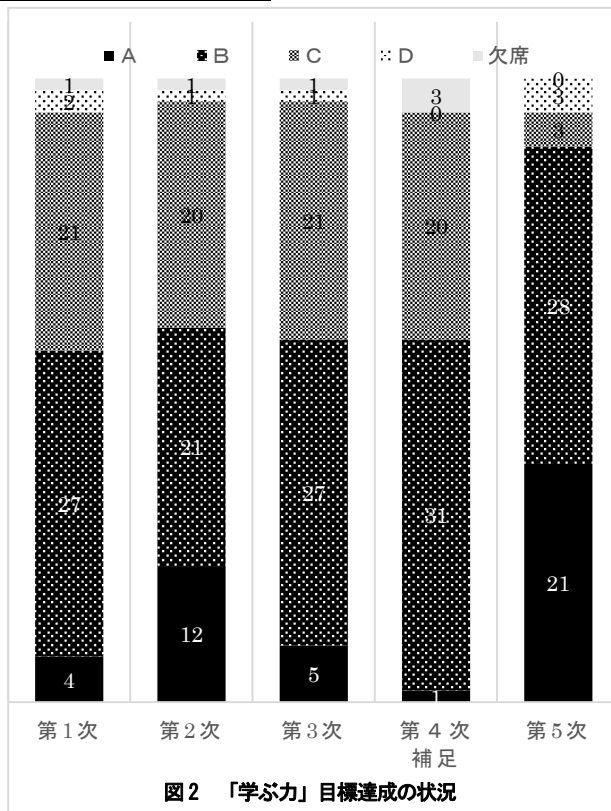
改善点1は、第1次で生徒と単元目標を共有することである。そこで、筆者の意見に対して考えをもつために必要なことを話し合い、「筆者の意見を受け入れる」「根拠に経験や知識を入れる」という二つのポイントにまとめた。改善点2は、毎時間の振り返りと単元のまとめを、生徒の学び方が可視化できるもの

にすることである。毎時間、筆者の意見を理解してから、振り返りとして上記の二つのポイントを踏まえて自分の考えを書かせ、二つのポイントが踏まえられているかを自己評価させるようにした。単元のまとめとして生徒が学び方を意識できるように、二つのポイントを使って筆者に手紙を書くという活動を取り入れた。

VI 毎時間の目標を別に設定し、それらを基に各次の評価指標を作成する

表4 「学ぶ力」 単元展開案

次	学習課題・学習活動	評価規準
1	○「筆者の意見に対して考える」上で重要なポイントを知ろう ・例文から重要なポイントとは何か考える	・二つのポイント「筆者の意見を受け入れる」「根拠に経験や知識を入れて」を踏まえて説明することができる【知識・技能】
2	○単元の目標を理解し、「学ぶ力」の文章構成を理解しよう ・単元の最後を書く手紙の例を見て、単元の目標を確認する ・「学ぶ力がある人」についての自分の考えを書く ・「学ぶ力」を読み、各大段落の問題提起を抜き出す	・自分の「学ぶ力がある人」の考えを、根拠に経験や知識を入れて説明している【読むこと】
3	○筆者の考える「学力」について理解し、自分の意見をもとう ・「学力」について一般的な考えと筆者の考え方の違いを考える ・筆者の考えと一般的な考えと、どちらが自分にとって役立つ力だと思うかを、根拠を入れて書く。	・筆者の「学力」に対する意見について共感できるかどうか、二つのポイントを入れて書いている【読むこと】
4	○筆者の考える「学ぶ力が伸びる条件」を理解し、自分の考えと比べよう ・分からない部分を質問して、分かりやすい言葉に言い換え ・共感できるかできないか、根拠を入れて付箋に書く	・筆者の「学ぶ力が伸びる条件」に対する意見に共感できるかどうか、根拠に経験や知識を入れて書いている【読むこと】
5 (最終次)	○筆者の手紙を書こう ・「筆者の意見に共感できるかできないか→根拠→学習後の自分の意見」で文章(手紙)を書く	・二つのポイント「筆者の意見を受け入れる」「根拠に経験や知識を入れて」を踏まえて自分の考えを書いている【読むこと】



【研究目的2】 学び方を別課題で活用する場の設定によって、生徒が学びの成果を実感する

授業実践1では、どのような学習課題によってどのように表現させるかが課題として挙がった。そこで考えた改善点は学び方を活用しやすい学習課題を設定することである。単元終了一ヶ月後に、課題作文という形で、授業者が作成した意見に対して二つのポイントを踏まえて文章を書くという学習課題を導入した。授業実践2の最終次の学習課題と同じ形式の学習課題なので、授業実践2の学び方が活用しやすいのではないかと考えた。さらに、目標の達成度を生徒にアンケート方式で回答させ、学びの成果が実感できたかを調査した。

② 結果と考察

【研究目的1】 目標と指導（活動）と評価が一体化した単元作りによって、生徒が目標達成の姿をイメージし、学び方を身に付ける

成果は、第1次から6割前後の安定した目標達成の状況が続き、最終次では約9割の生徒が目標を達成できたことである（図2）。第1次で、単元目標達成のためのポイントを二つに整理して提示したことにより、目標達成の姿がイメージしやすくなったと考えられる。また、毎時間ポイントを踏まえて書く学習課題を繰り返したことも効果的であった。更に、今回は自己評価を導入した。授業を重ねるごとに、自己

評価が適切にでき、目標達成できる生徒も増えていった。自己評価の繰り返しにより、「どんな内容をどのように表現していればいいのか」という学び方を実感できるようになったと考えられる。

課題は、毎時間の学習目標と学習課題（活動）のあり方である。「筆者の意見を受け入れる」では漠然としており、「筆者の意見を本文中の言葉で言い換える」「自分の言葉で言い換える」「身近な具体例を挙げて言い換える」など、段階的な目標と学習課題（活動）が必要であった。更に、自己評価を具体化する方法やタイミングも大きな課題である。国語科の特に「読むこと」の自己評価を具体化しすぎると、ヒントを与えすぎることになってしまう。評価の方法やタイミングは更に検討が必要である。

【研究目的2】 学び方を別課題で活用する場の設定によって、生徒が学びの成果を実感する

課題作文では、9割弱の生徒が「授業実践2」で学習した二つのポイントを踏まえて書くことができ、目標を達成することができた。生徒が学び方を身に付けた上で、他の場面で学び方を意図的に活用する。そのような場の設定が、「学びの成果の実感」につながる事が明らかになった。

5 本研究のまとめ

目標と指導（活動）と評価が一体化した単元展開を、主体的で成果を実感する学びに確実につなげるためには、以下の4点の工夫が有効であった。

第1に、単元目標を生徒と共有することである。単元目標を共有するためには、第1次に生徒が意識しやすい形で提示することが必要である。今回は、単元目標を達成するために必要なことを話し合い、二つのポイントとしてまとめた。このように、生徒が単元を通して意識しやすい形にしたのが効果的であった。

第2に、毎時間の振り返りや単元のまとめの中で、学び方を可視化できるものにする事である。今回は、二つのポイントを踏まえて振り返りや単元のまとめとして考えを書くという活動を行った。この活動により、毎時間生徒が単元目標達成を意識して活動し、学び方を意識することにつながった。

第3に、評価を生徒と共有することである。今回は、評価指標を自己評価という形で提示し、学び方を確認した。毎時間の学びを自己評価することを繰り返し、それにより自己評価力が向上し、学び方を身に付けたことを認識することにつながった。

第4に、単元の中で身に付けた学び方を、別課題で活用する場を設定することである。そのような場の設定により、生徒が学びの成果を実感できることが明らかになった。

毎時間、単元目標達成を意識して学習課題に取り組み、学びを可視化してそれを自己評価する。そのような螺旋的な単元展開にすることによって、生徒が学び方を身に付け、それを認識できることが分かった（図3）。更に、その学び方を他の課題で活用する。そのような場の設定により、生徒が学びの成果を実感できることも分かった。目標と指導（活動）と評価の一体化した螺旋的な単元展開の推進が、国語科の授業改善につながっていくと考えている。今後も、教師同士での情報交換を大切にし、生徒が学びの成果を実感できるような国語科の授業を共に創造していきたい。

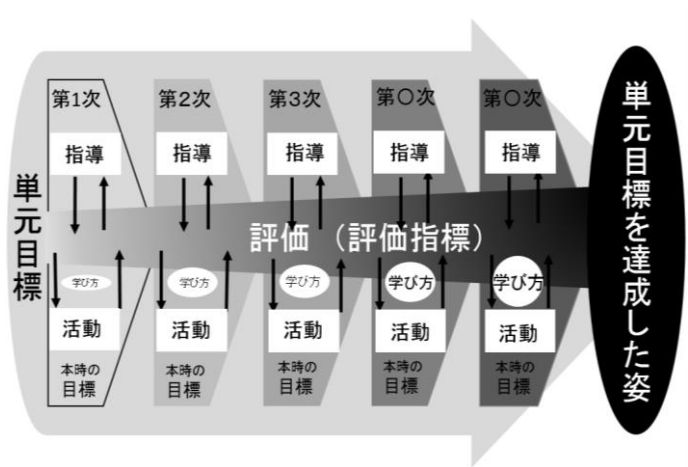


図3 目標と指導（活動）と評価が一体化した単元展開モデル